

踊りましょう！

八代美術協会会友 寺岡 伸章

日本エッセイスト・クラブの総会と授賞式に出席するために上京した機会を使って、映画『Shall we ダンス?』の舞台となった東京都内のダンスホールで踊った。営業五十年近い老舗で、都内では唯一の社交ダンスの殿堂だ。生バンドの演奏に合わせて、ドレスアップした女性たちが華麗にステップを踏む様子はまさに非常の世界だった。

だが、ダンサーたちの熱気にエアコンが追いつかず、オレンジ色の蝶ネクタイと黒のベスト姿の私は汗だくになった。おまけに、雑踏の中で他のカップルと何度もぶつかり、しまいには周囲に気を取られて音楽のリズム通りにステップを踏めずパートナーに注意されてしまった。ダンス歴二年の私の実力が露呈されたのだが、それでも楽しい時間を過ごした。

社交ダンスは美しい音楽に身を委ねながら、男女が一体となって踊る総合芸術とも言える。種目はワルツやタンゴなど十種類に及び、ウィーン、アルゼンチン、キューバ、ブラジル、アメリカと、世界各地に起源をもつ国際的なダンスだ。「食べて、飲んで、歌って、踊って」人生を楽しむ。ダンスは龍宮城のような楽しみのひとつであり、言葉よりも根源的な表現手段ではないだろうか。ストレスの多い現代社会において、社交ダンスは心身を解き放つひとときとなり得る。

映画が大ヒットした三十年前、日本の社交ダンス人口は世界一とも言われたが、現在では愛好者は激減し、ダンスホールや教室の閉鎖が相次いでいる。主な年齢層は七十代で、高齢化は止まらない。六十代後半の私はパーティーや教

室では「若手」に分類される。クルーズ船「飛鳥Ⅱ」にあったダンスホールも、後継の「飛鳥Ⅲ」には設けられていない。富裕層にも背を向けられてしまったようだ。

若い世代には社交ダンスはあまり人気がないのだが、日本人がダンスから遠ざかっているわけではない。オリンピック種目のブレイキンで若者たちが世界的に活躍しているように、むしろダンスの愛好者は増えているとも言える。ただ、社交ダンスに魅力を感じて飛び込んでくる若者は少ない。

では、社交ダンスの退潮の原因は何か。ひとつには初心者がパーティーを楽しめるようになるまでに時間がかかることが挙げられる。ジルバ、ワルツ、タンゴ、ルンバ、チャチャチャ、サンバなどの数十種類のステップを習得する必要がある。そのため、女性で一二年、男性では三五年のレッスンが必要とされ、参入のハードルが高い。

また、マナーや礼儀のような「堅苦しい」「上流階級の遊び」といったイメージも根強い。ワルツやタンゴでは男女が腰を接触させて踊ることから、自由度が低く束縛的と見られがちだ。実際には、上達すればするほど、見た目とは逆に互いに自由に、気ままに踊ることができるのだ。

男女平等が重視される現代にそぐわないという誤解もある。社交ダンスはヨーロッパの貴族文化に根ざしており、男性がリードし、女性がフォローするという非対称性から不平等な役割分担と見なされがちだ。確かに男性は踊りの構成を考える責任を担うが、同時に女性をいかに美しく見せるかという役割も負っている。一方、女性には自由に、華やかに、優雅に舞うことが求められる。社交ダンスはまさにカップルによる

共同作業である。

世界に目を向けると、戦争の陰が一段と色濃くなっている今、男女が寄り添って踊る姿は平和と繁栄、幸福の象徴に思える。全身で音楽を感じながら踊ること、心が若返るのを実感できよう。恋人たちが戦争で裂かれる映画『シエルブルーの雨傘』のテーマ音楽に身を任せながらステップを踏むと、平和の尊さが胸に沁みてくる。

社交ダンスは五感を働かせる軽いスポーツである。オキシトシンという幸せホルモンが分泌され、認知症の予防にも役立つと言われる。少し努力してステップを覚えれば、その先には至福の世界が広がっている。再び社交ダンスが脚光を浴びる日を楽しみにしている。

さあ、Shall we dance?